

物理学者はごみをこう見る —家庭ごみ・放射能ごみはゼロ・ウェイストで解決

広瀬立成◎著

町田市などの生きた事例に学び、市民の手で推進を

著者の広瀬立成氏は、原子物理学の専門家だ。東京大学原子核研究所を経て、フンボルト財団高級研究員としてハイデルベルク大学に留学し、欧州原子核研究機構（CERN）等との国際共同研究を進めた。そんな著者がごみ研究を手がけた当初は、「転向ですか」などと皮肉交じりに聞かれることもあったという。

きっかけは2000年春、著者が住む東京都町田市でプラスチック処理施設の建設計画が持ち上がったことだ。物理学の「タコつぼ」から「おそろおそろ顔を出してみた」。そこから、06～07年に開催された「町田市ごみゼロ市民会議」の代表に選ばれ、09年に発足したNPO法人「町田発・ゼロ・ウェイストの会」の理事長に就任するなど、どんどんごみとのかかわりが深まっていった。

植物、動物、菌類の3種の生命体の連携によって持続性が成り立っている指摘し、求められる「もったいない社会」では、制限のある資源採取を心がけ、「生命系に支えられた産業を」と呼びかける。実践に裏打ちされた方向性として、参考となるところ大であろう。



A5判、157頁

定価1,680円（税込）

自治体研究社

（TEL03-3235-5941）